

同胞感

ぶかぶか漂う
第27回



友達ができました。子供たちにはいい友達ができればいいなど願っていたけれど、自分のことなど何も期待はしていませんでした。私がいるタイのバンコクは最も日本人密度が高い海外。海外の日本人社会なんて面倒に決まってるし、世代的にも若い人ばかりだろうと思っていました。

しかし実際は少数派とはいえ同世代もいて、仲良くなる人とはあつという間に仲良くなれるものでした。友達が友達を紹介してくれ、友達が増えました。このスピード感は、赴任家族が集まるバンコクの特異性なのかもしれないので、限られた時間であることを全員が意識しています。だから展開が面白いくらいに速い！

さらに多かれ少なかれ、これまでに迷い、決断し、何がしかの犠牲を払って今、同じ場所にいます。コロナのロックダウンをそれぞれ孤独に耐えてきました。夫に帯同するためには

キャリアを諦めたり、海外にいたことで親の死に目に会えなかったり、思春期の子供を連れてきたものの心のケアに悩んでいた。似たような経験があります。言葉にしなくても、^{たぐひ}労いの気持ち、互いの心の底にある気がします。

一方、人の入れ替わりが早いせいで、赴任者の妻たちの中には、悩みを打ち明けられる相手がいまま、心を病んでしまう人もいます。子供を残して自殺してしまったという話を聞いたりすると、友達などいららないなんて強がっている場合じゃないですね。いつも一緒にいるわけではなくても、肌で感じた状況を思いやれるのは同じ街に住んでいるからこそ。大丈夫かな？とゆるく気にしあっている仲間。むしろ最重要でした。

見送る私にびびるNANA

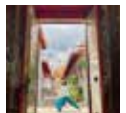
しかしせっかくだけきた大切な友達もまた、やはり帰国して行ってしま

ですが、多少の無理は押してでも、大事にしたことと大事なタイミングがある。みな同じ気持ち。即座に飛行機と宿の予約をし、修学旅行さながら四人部屋で寝てきました。

タイに来てからまだ一年三か月で、こんなにも友を見送らねばならないなんて。夫たちは日本に戻っても同じ会社という拠りどころがありますが、妻たちはリセットしてしまっています。時には正社員の職を手放したことを悔やむ日もあるかもしれませんが。だからこそ楽しい思い出を作って欲しい。来てよかったと思っていに考えてしまうのです。



そしてまた今週末、特に仲が良かった別の友達が帰国してしまいます。私と同時期にタイに来たばかりなのに、帰国が早まってしまいました。滞在の大半をコロナ規制下で過ごした彼女とタイの思い出を作るべく、女四人で二泊三日の国内旅行を決行。それぞれ家族を置いて家を空けたわけ



文 小宮華寿子
二男一女の母で
編集者。「ブラ
ジルの手しごと」
(マイツ出版)著者。世界の雑貨と
ワークショップの店「メルカジーニョ」
(<https://mercadinho.net>)代表。



イラスト・
デザイン
寺沼麻美
切り絵作家、時々
デザイナー。「ゆ
らゆらゆれる北欧風手作りモビ
ール」(ネコパブリッシング)を監修。